パンポン

わずか 7×2.5mの中で繰り広げられる熱き戦い

「パンポン」とは、木製のラケットと軟式テニスボールを使用して行うネット型のスポーツです。
大正 10 年頃、創業間もない日立製作所日立工場で始められました。
当時の従業員がミカンの空き箱を利用し、いつの間にか板切れを手にテニスボールを打ち合うようになったのが始まりです。昭和４年、「パンと打って、ポンと弾む」ところから「パンポン」と名付けられ、正式なルールを制定し今日に至っています。

～ルールのいろは～

①１ゲーム４点の２ゲーム先取で勝ちとします。
　※３－３の場合は先に５点目を取った方が勝ち
②サーブは１球交代で腰から下で打ちます。
③コートの大きさは７×２．５ｍで、サービスラインは６×１ｍ

～今やパンポンは全国区～

日立市発祥のスポーツは、メディアを通し、いつの間にか日立市以外の方にも楽しまれるスポーツとなりました。
用具は自作が可能で、誰でも行えるため、体を動かすにはもってこいのスポーツです。

～パンポンについてのお問合せ～

（公財）日立市体育協会
TEL０２９４－３６－６６６１
（http://www.hasa.or.jp/panpon/）

パンポンの誕生

「パンポン」は、大正１０年頃、創業間もない日立製作所日立工場で始められました。当時の従業員は昼休みを将棋や囲碁で過ごす者が多く、スポーツではキャッチボールをするぐらいしかありませんでした。しかし、建家のガラスを壊すケースが多く、これをやる範囲を限定したところ、ミカンの空き箱を利用していつの間にか板きれを手にテニスボールを打ち合い、お互いにルールを決めてゲームを行うようになりました。これが「パンポン」のそもそもの始まりです。

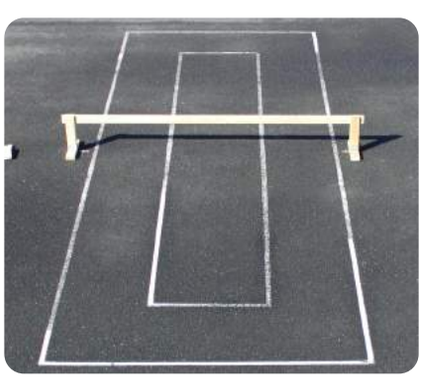
高尾直三郎　氏

パンポンの碑

これを昭和４年、名称も時の日立工場長であった高尾直三郎氏によって、「**パンと打って、ポンと弾む**」ところから「**パンポン**」と名づけられ、正式なルールが設定され、今日に至っています。
「パンポン」は、市内の各職場などの従業員が昼休みのひとときに体を動かすことにより、心身の
疲労を癒し、午後の仕事へと繋ぐために大変よく、昼食を済ませると職場内の通路や広場に白線で引かれたコートで一斉に「パンポン」が始まります。

パンポンの魅力

パンポンの最大の魅力は、いつでも、どこでも、誰でも、出来るスポーツであるということです。「パンポン」は、卓球とテニスをミックスしたようなスポーツであり、軟式テニスボールを板切れで打ち合う素朴なスポーツであります。現在のルールの種目としてはシングルス・ダブルス・ミックスダブルスがあり、ジャンケンによりサーブ権・コートサイドを決め、テニスや卓球のように相手コートに打ち合って行きます。



試合は、３ゲームマッチで、１ゲームは４ポイント先取した方が勝ちとなります。但し、３対３の場合は２ポイント先取した方が勝ちとなります。
（４対４の場合は１本勝負です）コートは縦７メートル、横２．５メートルでテニスコートに比べてかなり小さいものです。アウトラインの内側にサービスラインを引き、中央にコートを仕切る高さ４０ｃｍの木製のネットを置きます。ラケットは、まな板のような形の薄い板切れで裏側には危険防止のための指を引っ掛ける手持ち板を取り付けています。長さ３０ｃｍ、幅２０ｃｍ、厚さ１ｃｍ前後の表面は滑らかにする為にカンナをかけています。
また、道具は市販されていない為、殆ど手作りのものです。